

書寫山圓教寺

染 谷 秀 雄

四年ぶりの「秀」吟行会で室津・姫路へ行くことになった。以前計画していたがコロナ禍で行けなくなり、そのままとなつたところである。一泊では勿体ないとの話が持ち上がり、前日から有志七人で書寫山圓教寺を訪ねた。

九六六年、性空上人によつて開かれた天台宗別格本山で山号は書寫山。西国三十三所第二十七番札所である。西の比叡山と言われるところだ。姫路駅からバスで三〇分ほど走り、僅か四分ほどであるが播磨灘や市内を眺望できるロープウェイを使い、そこから更にマイクロバスで摩尼殿へと山内を登る。摩尼殿の舞台へは五十段ほどの急磴を登らなければならぬ。中に入つて欄干に凭れて外を見下ろす。全山新緑が目に染みる眺望だ。大正十年に焼失したが昭和八年に再建された。うす暗い摩尼殿の中に点された燭を映す油が水のように光つて見える。たっぷりと入っているのは菜種油である。この菜種油に映る種火は薄暗い摩尼殿を涼し氣に照らしていた。燭台の棚に献灯するときの種火であるという。貧しい寺のためか菜種油を蓄える缶。灯芯は短冊のようなものを束ねて継つたもので、いろいろ代用して種火にしていることを受付の寺の女性が話してくれた。その質素な行いに寺の慎ましさが窺われた摩尼殿であった。歌人としてその名を馳せた和泉式部は、晩年この世の無常を思い、来生に不安を感じ、圓教寺を訪ねたという伝承があり、奥之院の開山堂の横にはここで歌を詠んだことに由来して建立されたと言われる歌塚（一三三三年建立）が残されている。

暗きより暗き道にぞ入りぬべき

はるかに照らせ山のはの月

と、闇の中に居る罪深い我が身をこの月で照らして欲しいと詠んでいる。